

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.88

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2024年10月

主な記事

国際島嶼教育研究センター長就任にあたって（山本雅史）	p1
学生奮闘記「徳之島での実習を通して学んだこと」（箕輪夏里）	p3
フィールドこぼれ話「島人の暮らしとオカヤドカリ」（土井 航）	p7
連載 世界島めぐり 第十一回「ビティレブ島 フィジー」（河合 溪）	p9

国際島嶼教育研究センター長就任にあたって

国際島嶼教育研究センター長
山本雅史

本年度4月から国際島嶼教育研究センター（島嶼研）長に就任した農学部の中尾佐助です。島嶼研の前身の多島圏研究センターでは学部教員がセンター長となることも多かったようですが、平成22年4月の島嶼研への改組以降は島嶼研専任教員以外の初めてのセンター長となります。従来の、島嶼研の内容を熟知している専任教員のセンター長とは異なり、島嶼研のことを勉強しながらの管理運営となりますので、いろいろとご迷惑をおかけすることとなるものと思いますが、よろしく願いいたします。

島嶼研は昭和56年に南方海域研究センター（南海研）として誕生し、その後昭和63年から南太平洋海域研究センター、平成12年からの多島圏研究センターを経て、平成22年に現在の形に改組・スタートした40年以上の長い歴史のある研究センターです。発足当初の南海研のセンター長は中尾佐助先生です。先生の御

著書である『栽培植物と農耕の起源』は大学時代に、『秘境ブータン』も再刊されたものを拝読いたしました。これらは今でも書棚にあります。末席とはいえ、中尾先生に連なるポジションにいると考えることで身の引き締まる思いです。全く予想しなかったセンター長就任ですが、歴代のセンター長のご活躍に少しでも近づきたいと考えています。

今年度、島嶼研は4名の専任教員（定員）、1名の特任教員および2名の特任研究員で構成されています。これらメンバーに加え、鹿児島大学に所属する約60名の兼務教員や10名の客員研究と共同して研究活動を行なっています。また、現地の方々とも連携を深め、教育研究活動を実施していることは言うまでもありません。非常に小さな組織です。活動には多数の方の協力や支援が必要です。この点もよろしく願いいたします。

島嶼研の研究成果（論文）集が『南太平洋研

(2) 島嶼研だより No.88

究』(South Pacific Studies)であることが示しますように、現在も海外を含めた広範な地域での教育研究活動を展開していますが、近年、特に奄美群島における活動強化を目指しています。そのため、平成27年に奄美大島に奄美分室を開設しました。奄美分室の活動も現地に定着して参りました。現在、奄美分室には専任教員1名と特任教員2名が常駐し、地域に根差した教育研究を推進しています。また、奄美分室開設10周年を記念して、令和7年2月には奄美大島でのシンポジウムを予定しています。多くのご参加をお待ちしています。

現在、奄美群島における主な活動として、鹿児島大学の全学的プロジェクトミッション実現分「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地域創生』の革新的融合モデル」を令和4年度から実施しています。今年度は3年目ですので、成果を挙げる時期に入りました。島嶼研では水陸領域にわたる生物多様性のモニタリングを中心に、文化、社会、産業、健康などの研究も進めて行きます。モニタリングについては、本プロジェクトで実施体制を構築することで、これからの長年月の調査が可能となり、気候変動が地球環境に及ぼす影響などを長期的に研究することができます。

当然、奄美群島だけでなく、南太平洋域における教育研究も進めています。コロナウイルス流行で中断していたミクロネシアにおける海外共同調査も今年度から再開しました。また、昨年度まで日本学術振興会のアジア研究拠点形成事業でフィリピン、マレーシア、インドネシアの大学と連携して研究を進めてきました。今年度はそれに代わる事業にも申請予定です。

このように、奄美群島など我が国の島嶼域と南太平洋域など海外の島嶼域における教育研

究のバランスをとりつつ、島嶼域における教育研究の拠点機能の一層の進展を図らなければいけないと考えています。微力ながら少しでもそれらに貢献できれば幸いです。

個人的には、奄美群島を中心とした島嶼域は在来カンキツ研究のフィールドでした。25年間、毎年のように島々で調査を続けてきましたが、ほとんどカンキツだけを考えてきました。これからはセンター長として、自分の研究分野以外の幅広い領域についても、島の教育研究に関わることができることを楽しみにしています。



ミクロネシア調査にて



シンポジウムで報告する山本センター長

学生奮闘記

徳之島での実習を通して学んだこと

箕輪 夏里

(鹿児島大学大学院保健学研究科助産学コース2年)

今年の6月中旬から約6週間、助産学実習で徳之島を訪れました。実習では10名の妊産婦に妊婦健診から、分娩介助、産後まで継続的に関わらせていただきました。分娩介助では、分娩の進行状態をアセスメントし、促進ケアや産痛緩和を行い、安全なお産となるようにサポートさせていただきました。徳之島で働かされている助産師は、島内唯一の分娩施設で働く助産師としての責任感ややりがいを感じ、妊産婦1人1人に対して丁寧に関わっている姿が印象的でした。実習を通して、知識や技術の習得だけではなく、その人に合ったケアの実践や信頼関係構築の大切さといった助産師としての心構えについても学ぶことができました。島民の方々も、出産や育児に主体的に臨み、子宝の島といわれるように、子どもを産み育てることに對して周囲も協力的で、子育てしやすい環境があることを実感しました。

また、9月上旬に徳之島で行われた離島・地域母子保健学実習では、母子保健事業への参加や専門職種へのインタビューを行い、限られた医療機器やマンパワー、島外搬送の可能性がある中でも、多職種連携や地域にある社会資源の活用、人と人との繋がりにより、島民が島での妊娠・出産・育児に魅力や安心感をえられるような関わりの大切さを学ぶことができました。



写真1 実習施設前での写真



写真2 地域で活躍される助産師との交流の様子

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第237回

2024年3月18日

自然と調和した可能性のある島(?) 先史時代の奄美・沖縄諸島
高宮広土
(国際島嶼教育研究センター)

「先史時代」とはヒトは存在するが文字のない時代のことを言う。すなわち、厳密に言えば、

歴史時代とは文字を伴う時代のことである。さて、奄美・沖縄諸島の先史時代は一般的に旧石器時代(3万年前~1万年前)、貝塚時代(1万年前?~1000年前)およびグスク時代(11世紀後半~15世紀)から構成されている。この地域の先史時代を世界的なレベルで他の島々と比較すると他地域の島々の先史時代には存在しない大変珍しい文化現象がいくつかあった

ことが最近の研究で示唆されている。今回の発表ではそのうちの一つである「自然と調和した可能性のある島(?)」について紹介したい。

島嶼環境を研究する研究者の島の環境に関する意見は「島の環境は大変脆弱である」ということである。この点は現代だけではなく、過去にも当てはまる。島が成立してそこに植物や動物が植民し、何万年あるいは何千万年という長い時を経て、バランスの取れた環境が創造される。そこに新しい種が植民すると島の環境は最も簡単にそのバランスが崩れると考えられている。その「新しい種」で最も島嶼環境に影響を与える生物がヒトである。ヒト1種がバランスと取れた環境に植民するだけで、彼・彼女らは森林資源および生息する動植物を利用する。これらの行動が引き金となり、島嶼環境は激変する。

世界の島の先史学から提言されている「定説に近い仮説」は「ヒトが島嶼環境に適応すると島の環境は劣悪化あるいは環境破壊が起こる」というものである。オセアニアの島々、カリブ海の島々および地中海の島々では、ヒトが島に出現すると森林破壊や土砂崩れが報告され、さらに多くの動物が絶滅したことが確認されている。

奄美・沖縄諸島でもヒトの植民後、おそらく環境破壊あるいは劣悪化が起こったと考えられ、先史時代におけるヒトと島嶼環境について考察した。しかし、奄美・沖縄諸島先史時代においては、上記の「定説に近い仮説」は当てはまらないかもしれない。先史的・考古学的調査のなされた島において、このような島は世界に他に存在しないかもしれない。



高宮広土 氏

鹿児島県南西諸島在来カンキツ類の機能性
探索

坂尾こず枝

(鹿児島大学農学部)

鹿児島県の南西諸島には、特定の地域でのみ栽培されているカンキツ類がある。これらのカンキツ類の多くは南西諸島特有のものであり、特徴的な機能性成分を含有している可能性がある。例えば、沖縄県で有名なシークワサーは、ダイエット効果で知られるポリメトキシフラボノイドを豊富に含み、商業的に利用されている。つまり、これらのカンキツ類の極めてユニークな成分や生理活性を解明することは、南西諸島在来のカンキツ類に新たな価値を生み出し、利用促進に繋がるのが期待される。

これまで発表者の研究グループは、南西諸島在来カンキツ類について、抗酸化作用、美白作用、がん予防作用などの生理活性を調べてきた。本発表では、これらの成果の概要を紹介するとともに、特に抗肥満作用と血糖値上昇抑制作用に焦点を当てた研究結果を提示する。

α -グルコシダーゼ阻害活性およびリパーゼ阻害活性の評価による血糖値上昇抑制効果および抗肥満効果の検証では、喜界ミカンおよびクネンボに高い酵素阻害活性が認められた。また、喜界ミカンとクネンボはカイコの糖尿病モデル実験においても顕著な効果を示した。実験の結果、特に喜界ミカンにはインスリンと同様の血糖降下作用があり、脂肪体内のグルコースも増加させることが確認された。今後、より詳細な機能性成分の分析を行い、モデルマウスを用いて抗肥満・抗糖尿病効果を検証する。



坂尾こず枝 氏

第 239 回 2024 年 6 月 24 日

ある島人の日露戦争体験—大納宮継『征露日記』を中心に—
平井一臣
(鹿児島大学法文学部客員教授)

2021 年、沖永良部島の住民・大納宮継(おおのみやつぐ)が書き残した『征露日記』の所在が明らかにされました。宮継のひ孫にあたる大納忠人(ただひと)氏により知名町立図書館に寄贈されたものです。1904 年(明治 37 年)2 月 5 日から始まる日記には、中断をはさみながら、翌年 6 月 10 日までの記載があります。

日露戦争に従軍した将兵の日記類は、私家版も含めるとかなりの数が確認できると言われています。また、日記を素材にした研究もすでにいくつか発表されています。大納日記は、そうした日露戦争時の日記類の一つですが、少なくとも以下のような特徴があると言えます。

- ①離島からの出征者の従軍経験が記されており、とくに沖永良部島を出発するまでの送迎の様子と奄美の島々を寄港し鹿児島市の第 45 聯隊入隊までの様子、さらに鹿児島から門司への移動について、興味深い記載がなされています。
- ②上陸した朝鮮半島での見聞(とくに釜山と仁川)や駐留地である元山での状況についての記載があります。日露戦争関連の日記類の多くは、主作戦地とされた満洲方面への出征者のものです。朝鮮半島の東側に位置する元山方面についての記録は貴重なものと言えます。
- ③病気による除隊とその後の経緯についての記載があり、軍事救護問題を考察する手掛かりを提供するものでもあります。



平井一臣 氏

第 240 回 2024 年 7 月 22 日

ミドリイシ属サンゴの生殖戦略について
北之坊誠也
(国際島嶼教育研究センター)

サンゴ礁は海洋面積全体の 0.2% を占めるにすぎないが、全海洋生物の約 25% がそこに生息している。そのためサンゴ礁は、生物多様性の保全にとって極めて重要な生態系である。サンゴ礁を形成する造礁サンゴは、地球上に約 5 億年以上前から存在し、さまざまな気候変動に耐えながら生き延びてきた。造礁サンゴが生息し続けてきた理由は何であろうか? サンゴは進化の過程で頻繁に異種間交雑が起こったと考えられている。通常、異種との交雑は子孫を残すのが難しくなるため、不利だと考えられている。しかしながら、近年の実験室内での研究により、ミドリイシ属サンゴのうち約 3 分の 1 が異種のサンゴと受精できることが報告されている。このような交雑がなぜ維持されているのかは不明である。そこで、ミドリイシ属サンゴの異種間交雑に関する研究を進めるため、一斉産卵(卵と精子が混ざり合った状態)を再現し、どのような条件で異種のサンゴと受精が起きるか検証した。その結果、精子濃度が高いときは同種と受精し、精子濃度が低くなると同種精子が混在しているにも関わらず、交雑することが判明した。すなわち野外でのサンゴの生息数が減少すると、産卵時に海中に放出される精子の数が減少する可能性が考えられる。その場合、異種のサンゴとの受精が可能となり、子孫を残すことができるというわけである。これが、サンゴが長い間生き延びてきた理由の一つであるかもしれない。



北之坊誠也 氏

日本軍占領下のナウル島におけるピジン英語
の保持をめぐる

岡村 徹

(公立小松大学国際文化交流学部)

1907 年、燐鉱石の採掘労働者としてナウル島に入島した中国人は、現地島民との間で、ピジン英語と呼ばれる言語を使って、島内にある商店やレストランや採掘場で、島民らとコミュニケーションをはかってきた。当該のピジン英語は、今日でも、その姿や形を変えながら、島内で社会的に機能している。しかし、旧日本海軍が 1942 年の 8 月にナウル島を占領し、大日本帝国の一員としての教育を島民に施すばかりでなく、農業用の化学肥料として重宝された、燐鉱資源の開発まで着手したため、当時の島民らの言語の使用に影響が及んだ。旧国策会社の一つとして知られる、南洋拓殖株式会社の社員も日本海軍の施政に協力している。

旧日本海軍が、ナウル島に来島する前の、1941 年 2 月 23 日、多くの中国人や欧州人がナウル島から離島したため、当該の言語を保持することが、きわめて困難になった。戦後、ピジン英語の話者がナウル島に戻って来たことにより、再び島内で社会的に機能し始めた。

本発表では、当該の言語が戦時下において、危機に瀕した要因について考察する。



岡村 徹 氏

サモア独立国における「障害」概念の受容
—「生涯学」の視点から—

倉田 誠

(東京医科大学医学部)

サモア独立国では、1975 年の「障害者の権利宣言」や 1981 年の「国際障害年」を契機としていくつかの民間の障害者支援団体が創設された。今世紀に入ると、オーストラリアをはじめとする諸外国から民間団体への積極的な援助を受けて、全国的な障害者支援の展開や「障害 (disability)」概念の浸透が図られるようになっていく。しかし、総人口 20 万人程度の島嶼国において様々な「障害」に応じた医療や教育の仕組みを整備することは難しく、現代でも「能力 (ability)」という見かたが人びとの間に浸透しているとは言えない。実際に、彼／彼女らは、医療や教育による個人に対する評価というより、これら団体や団体が提供するモノやサービスとの関係から「障害」や「障害者」というものを認識する傾向にある。

本発表では、これまでの経緯をふりかえりながら、サモア社会において民間団体を中心に障害者支援がいかに拡大され、その過程で「障害 (disability)」という概念がどのように受容されてきたのかを検討する。また、「生涯学」という視点からサモア独立国の事例を検討することで、私たちの生涯や社会のあり方をいかに捉えなおすことができるかも考えたい。



倉田 誠 氏

～フィールドこぼれ話～

島人の暮らしとオカヤドカリ

土井 航 (水産学部)

沖縄県西表島西部の集落跡地において、半陸生の甲殻類であるオカヤドカリ類の生態について研究を行った。西表島西部には舟浮という集落があり、そこへ至る陸路がないため、近隣の集落との間を船で移動する。この舟浮よりさらに西に、網取と崎山という2つの集落跡地が存在する。網取村には、17世紀初頭から1971年にかけて100～200人の人々が半農半漁の生活をしてきた。5世紀ごろには一時的な狩猟採集の場として利用されていたことが判明している。網取よりさらに西の崎山村には、1755年から1945年まで最大で400人の集落が形成され、水稻が栽培されていた。これらの2つの集落跡地は、網取の方が長い歴史を持ち、かつ最近まで人々が生活していた場所である。

南西諸島や小笠原諸島を中心に、日本からは7種のオカヤドカリ属が記録されている。オカヤドカリ類は陸上で生活するヤドカリの仲間であり、海産のヤドカリと同様に、巻貝を背負って軟弱な腹部を貝殻の中に入れて生活する。オオナキオカヤドカリは国内では八重山諸島に比較的多く生息する種であり、海岸でよく見られる小さなオカヤドカリ類（多くはナキオカヤドカリ）に比べると、かなり大きく成長する。本種は、国指定の準絶滅危惧種であり、沖縄県指定の希少種でもある。

2つの集落跡地において、オオナキオカヤドカリの生息個体数と利用している貝殻を調査した結果、網取には他の地域に比べ、生息個体数が多く、体サイズの大きな個体が多いことが判明した。網取のオオナキオカヤドカリの大型個体は、かつての住民が捨てたチョウセンサザエの貝殻を宿貝として利用することで、大型化していた。チョウセンサザエは、日本本土のサザエに代わる南西諸島における食用の腹足類であり、先史時代から現在に至るまで重要な食料とされてきた。この貝殻はオカヤドカリ類の大型種にとって理想的な宿貝であると考えられ、発掘された貝塚においてチョウセンサザエの貝殻が明らかに少ないのは、オカヤドカリ類の仕業と推測される。一方、崎山においてはチョウセンサザエに寄居する個体が少なく、また、それらの貝殻の表面が摩耗し、穴が空くなど劣化が進んだものが多く見られた。また、体のほとんどを貝殻の中に入れることができない個体、つまり体の大きさに対して小さな貝殻を利用している個体の割合も多く見受けられた。

人が住まなくなり、人為的な貝殻供給が途絶えた環境では、貝殻の劣化が進み、オカヤドカリ類の個体群の縮小や個体の体サイズの小型化が進むと考えられる。実際、人が生活していない海岸や近隣の無人島のオオナキオカヤドカリには、リュウキュウサザエに寄居した大型個体はほとんど見られない。対照的に、貝殻が現在も投棄されている場所では、多くの大型個体が観察される。甲殻類の活動が活発になる夜の網取では、暗闇の中でかつての村民が残っていた陶器などの残骸の間を、大きなオオナキオカヤドカリが歩き回っているのが観察された。やがて、利用可能な貝殻が減少すると、網取の村民が次々と村を離れていったのと同様に、同地のオオナキオカヤドカリ集団も、個体群のサイズおよび体サイズともに縮小していくのではないかと、儚さを感じるものである。

(関連写真は次ページ)

～フィールドごぼれ話～



写真1 崎山集落跡地の様子
(2015年8月撮影)



写真2 網取集落跡地内の様子
(2015年8月撮影)



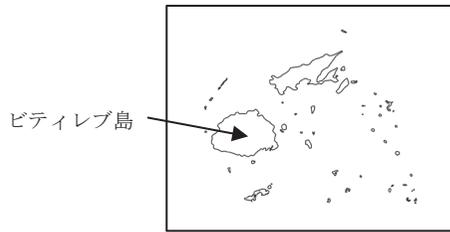
写真3 網取(左)と崎山(右)のオオナキオカヤドカリ

「世界島めぐり」

第十一回 ビティレブ島 フィジー (Viti levu Island, Fiji)

河合 溪 (国際島嶼教育研究センター)

フィジーは南太平洋に位置し、約 300 の島々から形成されている島嶼国である。その島々の中で一番大きな島がビティレブ島である。島の中央には一番高いトバニビ山 (1,324m) がそびえ、島の西側は比較的乾燥し、東側は雨の多い地域になっている。この島の西には国際空港がある都市ナンディが位置し観光の中心に、東には首都スバが位置し行政の中心になっている。沿岸域には多くの集落が点在し、農水産業を主体とし首長を中心とした伝統的な社会経済システムがまだ残っている地域もある。



フィジー 地図



写真1 首都スバのマーケットの様子



写真2 集落の教会



写真3 集落における伝統的なカバの儀式

令和6年度客員研究員

国際島嶼教育研究センターではタイプⅠとⅡ、Ⅲという3つのカテゴリーの客員研究員が在職しています。

本年度の客員研究員は以下の通りです。

タイプⅠ：奄美分室利用型

(10) 島嶼研だより No. 88

- 原田 敬子（東京音楽大学）
「喜界島と奄美大島における島唄の継承についての動態調査 言語消滅危機、教育の観点から」
- 川口 雅之（鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）
「貝塚時代における石器・鉄器の生産と流通の解明」

タイプ II：島嶼研究推進型

- 池田 忠徳（奄美市役所）
「奄美群島振興開発特別措置法及び同事業に係る研究（奄振再考と今後の方向性）」
- 高槻 義隆
「奄美大島における伝統作物の現状と課題」

タイプ III：自己資金型

- 森 隆子
「島嶼型看護実践を基盤とした学習プログラム教材の開発」
- 宋 多情
「世界自然遺産とエコツーリズムが地域社会に及ぼす影響に関する文化人類学的研究」
- 高宮 広土
「先史時代奄美・沖縄諸島における島嶼文明の解明」
- 谷口 光代
「マイクロネシアおよび奄美群島における蚊媒介性感染症対策に関する研究」
- 金子 美千代
「地域の介護観・子育て観に即した地域共生社会実現を目指す地域看護活動のモデルの開発」
- 前田 慶太
「地域の死生観に基づく尊厳ある意思決定支援モデルの開発」

編集後記

今年は島外調査と台風が来るときが重なることが多く、奄美に戻ってくるタイミングを見つるのが難しい夏でした。（KK）

島嶼研だより No.88 令和6年10月30日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>
